十　二　節　気　の　夏

昔よりも夏が長くなったように感じる。

体感では６月半ばから９月半ば頃までは夏と言えるだろう。あと 20 年もすれば４月から 10 月の半年が夏なんてことも考えられる。四季なんて名前なのに半分も夏になり、春と秋がなくなってしまう。そう思うだろうがそれは少し違う。春や秋は夏に重なり、夏の色合いを変化させていく。いろんな色を持った夏は、単に一つの季節ではなくなりさらに細かい季節の変わり目を見えるようにしてくれる。

都市に生きる私たちは季節感を感じることが少なくなったと思う。もっと風情だったり情趣だったりを感じ取れたはずなのに、心の窮屈な生活をしてはいないだろうか。

“いろんな夏”はそんな季節の変化を思い出させてくれる。夏は暑いで片付けていたものが夏の違い、季節の違いに敏感に築けるようになる。心の豊かな生活を取り戻させてくれる。そんな季節が感じられる家に暮らせたらどんなに良いだろう。

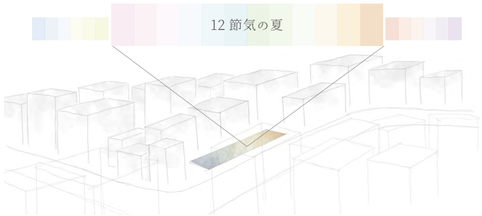
１．夏が長くなる

25 度を超える日が続くと人は夏が来たと感じるらしい。20 年前には７月から８月半ばが夏だったものが今では６月半ばから９月半ばごろまでは夏と感じる人が多いらしい。このペースで夏が長くなれば 20 年後には半年が夏と感じるようになるだろう。

２．いろんな夏

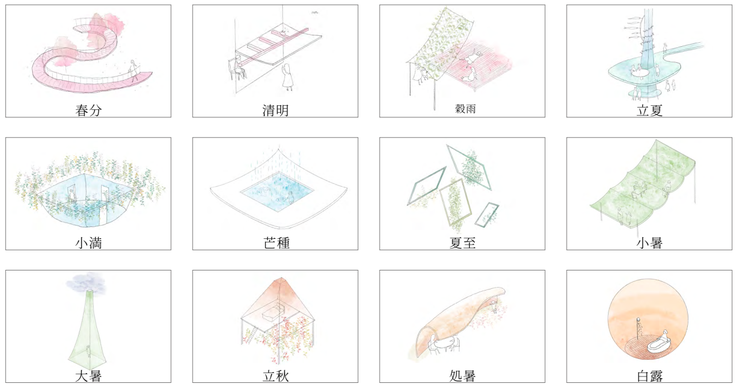
夏が伸びると、春と秋は夏と重なり始める。例えば梅雨。少し前までは春の終わりに梅雨がきて、雨がやめば夏になると思っていたが、今年は梅雨が夏に飲み込まれていたように感じた。季節が重なると、夏の中に複数の季節ができいろんな夏が生まれ、私たちの中で夏は一つではなくなる。季節に繊細に気づくことは私たちに心のゆとりをくれる。

３．十二節気の夏を写すイエ



二十四節気における４月から 10 月は春分から白露の十二節気にあたる。20 年間でこの十二節気の夏ができていく変化に気づけるように、それぞれの節気を写す空間を設計する。各節気の印象を形式化し動線に沿って配置していく。生活の中で強調される空間が変わっていくことで季節の変わり目を創出する。

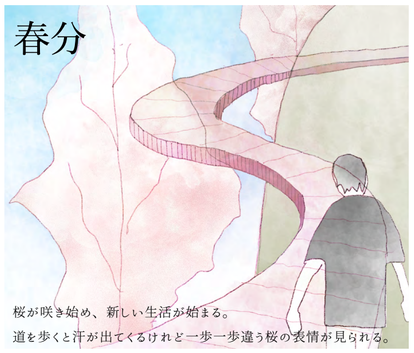
４．季節の変わり目を知らせるモノたち



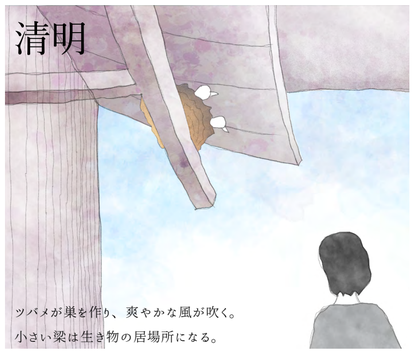
十二節気それぞれを際立たせる舞台装置をもち、季節を繊細に感じ取れる住宅を設計する。視点場として成り立つ舞台装置は季節の変わり目を知らせる動物や風景を街に呼び寄せる。

５．他の季節の儚さ

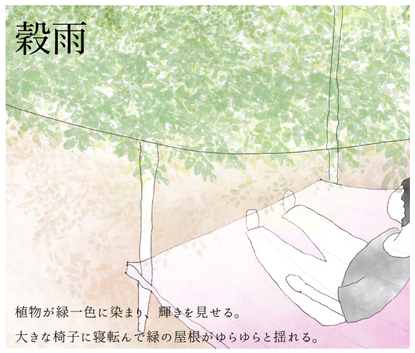
夏が長くなったいま、冬の性格も変わった気がする。よく見てみると、冬だって春や秋と重なっていたんだと気づく。１年を通して季節は細かく変化しているんだときづく。なんとなく短く感じる冬はそこにぎゅっと詰め込んだようなものになって日々違う冬に出会うことが楽しみになった。



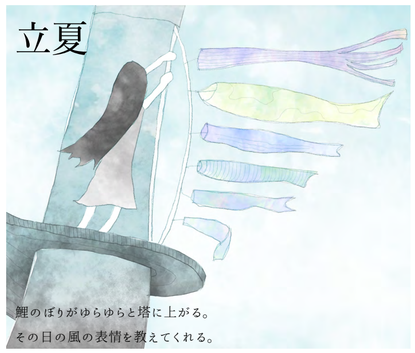
桜が咲き始め、新しい生活が始まる。
道を歩くと汗が出てくるけれど一歩一歩違う桜の表情が見られる。



ツバメが巣を作り、爽やかな風が吹く。
小さい梁は生き物の居場所になる。

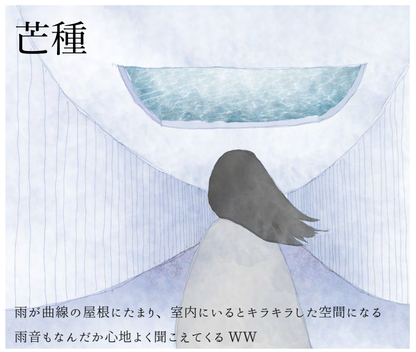


植物が緑一色に染まり、輝きを見せる。
大きな椅子に寝転んで緑の屋根がゆらゆらと揺れる。

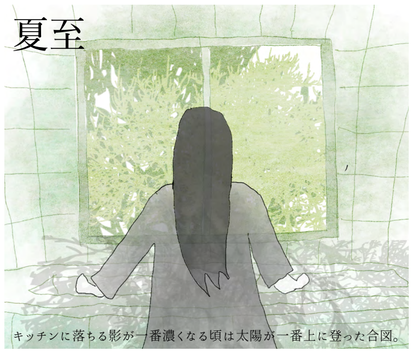


鯉のぼりがゆらゆらと塔に上がる。
その日の風の表情を教えてくれる。

桑の巣を食べる蚕、紅花、穂を実らせた麦などがこの道を彩る。

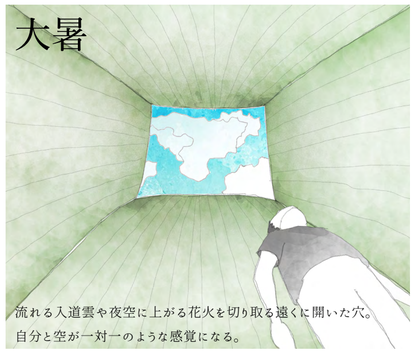


雨が曲線の屋根にたまり、室内にいるとキラキラした空間になる
雨音もなんだか心地よく聞こえてくる WW



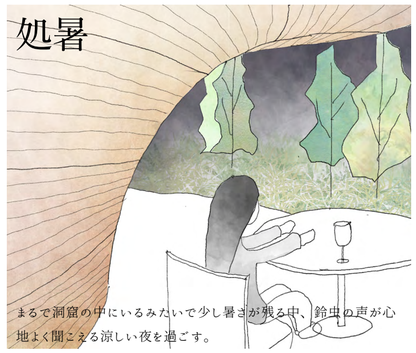
キッチンに落ちる影が一番濃くなる頃は太陽が一番上に登った合図。

ジメジメした時期が明ける。
屋根にせみの声が反射し、空間に響き渡る。

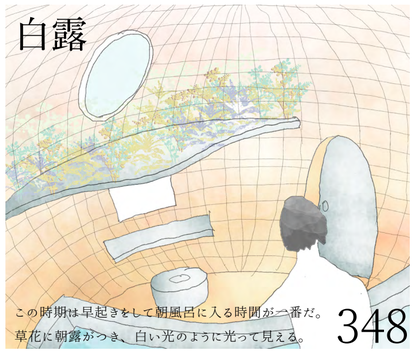


流れる入道雲や夜空に上がる花火を切り取る遠くに開いた穴。
自分と空が一対一のような感覚になる。

ヒグラシが鳴き始めるころ。
大きいカーテンが住民たちに涼風を届ける。



まるで洞窟の中にいるみたいで少し暑さが残る中、鈴虫の声が心地よく聞こえる涼しい夜を過ごす。



この時期は早起きをして朝風呂に入る時間が一番だ。
草花に朝露がつき、白い光のように光って見える。